

変わったこと・変わること・変えること

巻頭言



金属労協(JCM)事務局長
浅沼弘一

前回この巻頭言を書いてからの半年を振り返ってみる。半分は在宅勤務。Web会議はごく普通の日常に。夜の懇親会は激減し、おかげで体調は万全。大会は完全にWebで。協議委員会は会場参加とWeb参加のいわゆるハイブリッドで開催(概ね7割がWeb参加)。もちろん記者会見もWeb(記者からの質問はチャットなので変な質問がなくてよい)。地方ブロックの会議への参加はWeb参加であるため国内出張激減。さらに、国境を越えるには時間と手間がかかるため、インダストリアル関連をはじめ、すべての国際会議や研修がWebに。なので、今年一度も国境を越えることがなかった。

めまぐるしく変る半年であったが、Web会議が日常になったのは大きい。

会議の直前まで別の仕事をしていても、すぐに会議に参加できるし、終わったらすぐに次の仕事に移れる。海外での会議にはこの効果が顕著である。欧州だと12時間ぐらい、東南アジアでも6時間ぐらい移動にかかっていたわけで、この時間を省略することが出来るし、移動費用

も全くかからない(おかげですつつづいていた赤字から脱することができた)。残った問題は時差で、これだけではどうしようもない。欧州主催の会議だと、夕方から深夜日付が変わるころまでかかってしまう。

便利で効率的なのはよいのだが、私のような昭和な労働組合活動が染みついている者にとって、人と会って話をしないことがストレスになり、積み重なる。今月初め、久しぶりに対面の会議に参加したが、内容はともかくとして、対面で議論したことで何となく晴れ晴れとした気分になった。そう考えると、すべてがWeb会議というのは行きすぎ。このコロナ禍がおちついて、環境がゆるされるようになった後は、Webでの会議と対面での会議をうまく組み合わせて、使い分けることになると思う。

そうすると、その会議が、情報交換・情報伝達のための会議なのか、あるいは議論によって解をみつけるための会議なのか、切り分けることになるだろう。

目的は何なのか、本来何をやるようとしているのかが問われることになると思う。考えてみると、これは会議にとどまるだけでなく、我々の運動のありかた自体を問い直すことになるに違いない。コロナ禍をきっかけとして、先人から引き継いできた、産別の、単組

の活動・運動を棚卸しようとする流れができるのではないか。

産業はデジタル革命や電動化によって大きく様変わりしようとしており、仕事もそれによって変貌しようとしている。現場で働いている次の世代を担う人たちは、我々(特に半世紀以上を生きてきたような古手)の育った環境と全く違った環境で育ってきている。生まれた時から携帯電話があり、インターネットで調べものをして、見慣れぬ物体に向かって「ハイ」とか「オッケー」とか言っている。きっと使い込んで手垢のついた辞書や分厚くなった時刻表なんて使ったことはおろか、見たこともないのだろうと思う。

今を逃したら、しばらくは変革のチャンスは訪れないのではないかとと思う。瀬戸際、崖っぷちである。「禍を転じて福となす」ためには、今を好機ととらえて、流れを止めない忍耐が必要。とにかく変えてみることである。じゃないですか？

第63回協議委員会は会場参加とweb参加のハイブリッドで開催(2020年12月3日)

